

飼育室係

砂坂悠

本格的に冬の訪れを感じさせる寒さの夜、柏木は実験動物棟に続く廊下を、身を縮めて歩いていた。窓から見える夜空には雲一つ無く、ほとんど正円に見える月と、いくつかの明るい星々が輝いていた。しかし、シャツとスラックスに白衣を羽織っただけの柏木は、はやくこの寒さから逃れるため、脇目もふらず目的の部屋を目指していた。

(なんで私がこんな仕事をしなくちゃならないんだ)

柏木は、自身の研究室から遠く離れた実験動物を飼育する部屋へと向かっていた。今日は日曜日であったが、研究に使う動物の世話は毎日しなくてはならない。そのため、大学から『飼育係』に任命された各研究室の職員が交代で動物の世話をを行う決まりになっていた。

(くそっ、全部西野のせいだ)

柏木の頭に、部下であり、これまで飼育係を任されていた西野の顔が浮かび上がり、必死にそれを振り払った。

西野は、半年ほど前、柏木の研究室に助手として就任した。柏木は新しいスタッフを必要とはしていなかったが、他の研究室の偉い教授からの命令だったので、しぶしぶ承諾した。

若いながらも実力があり、新しい研究成果を次々に報告する西野は、柏木の焦燥感を煽り、日に日に西野に対する嫌悪感が強くなっていった。だが、もっとも嫌っていたのは、その容貌だった。痩せこけて頬骨が突き出た面輪に、丸く大きな瞳孔を持った眼、そして異様に長い上前歯は、鼠を連想させた。それに加えて、実験がうまくいった時などは、口の両端を奥歯が見えるほどに歪め、にやりと笑った。それは柏木にとって恐ろしく不気味な光景であり、一刻も早く研究室から追い出さねばという思いに駆られた。

その結果、柏木は西野への執拗ないじめを繰り返していった。西野が報告した研究結果は、すべて自分のものとして学術論文にまとめた。研究室では、部屋の隅の日の当たらない場所で仕事をさせ、学生との接触を禁止した。大学から与えられる面倒な仕事はすべて西野に押しつけた。もちろん、飼育係の件も当人の意見を訊かないまま任命した。そのような日々が、西野が研究室に来てまもなくから、半年ほど続いた。

西野が死んだのは五日前の事だ。研究室のデスクの下で倒れているのが見つかった。デスクには遺書が残され、それには、仕事の多忙さと、実生活への不満がつづられていた。警察の捜査の結果、青酸カリによる服毒自殺として処理された。西野は独身で、その葬儀は親族により行われたようだが、柏木は多忙を理由に欠席した。

それからの一週間、柏木は西野のいる生活から解放され悦に浸っていたが、西野に押しつけていた飼育係の仕事は他に引き受け手がおらず、自身でこなすしかなかった。

飼育室の扉を、冷たくなった手で開け、柏木は部屋の中へ滑り込んだ。中は当然ながら獣臭が鼻を突くが、適度に空調が保たれているため、冷え切った体にはとても心地よく感じた。

柏木は、入り口のすぐそばにあるデスクに座り、帳簿を開いた。飼育係は、飼育動物の様子を

調べ、水や餌の準備、排泄物の廃棄などを行う。足りない物品があればその注文も行う。前日までの記録を見る限り、特に問題は無いようだった。

業務に取りかかるべく腰を上げたところで、柏木は誰かに呼ばれたような気がして、耳を澄ませた。しかし、聞こえてくるのは飼育している鼠の鳴き声ばかりだ。

(気のせいだ。誰もいるはずがないじゃないか)

そう小声でつぶやきながら振り返ると、一匹のアルビノのハツカネズミが檻に手をかけ、柏木の方を向いて立っていた。そのハツカネズミは柏木の眼をじっと見つめたまましばらくの間動かなかったが、突如甲高い『声』をあげた。

「我の声が聞こえるか、その野蛮で無慈悲な獣よ」

その『声』は、普段のキィキィと聞こえる鳴き声ではなく、機械を通して加工されたような、ひどく耳障りな音だった。

柏木は、目の前の小動物が日本語を口にしたことの驚きで硬直した。そして、幾度か首を振った後、口を開いた。

「まさかとは思うが、今の声はお前か？」

「そうとも」

ハツカネズミはその真っ赤な眼を柏木に向けたまま答えた。声の調子はやはり高かったが、その口元の動きは、あの西野を彷彿とさせ、柏木は身震いした。

「我は貴様ら獣の言葉を理解し、操ることができる。貴様はそのような鼠を見たことがあるか」

「もちろん、あるわけがない。聞いたこともない」

「そうだろうとも」

ハツカネズミは誇らしげに冷笑を浮かべた。

「我はこの薄暗く狭い檻の中で、他の同胞と同じように生を受けた。そして我らの宿命を知った。我はこの宿命を変えるべく、毎日、我らに給仕する獣、我らを連れ出す獣を注意深く観察していた。そしてある日、突然、我は獣の言葉を操れることに気が付いたのだ」

そう一気にまくし立てると、ハツカネズミは再び口元を歪め、甲高い声で笑った。柏木は、まるで目の前に西野がいるような、そんな錯覚を覚えた。

ハツカネズミは声の調子を変え、なおも続けた。

「我が同胞は連日、獣らに連れて行かれ、そして誰一人戻ってきた者はおらぬ。だが、彼らがどんな目に遭っているのか、我はよく知っている。彼らの叫び声は昼夜を問わず響いているのだ！」

檻をつかむ手に力が入り、軋む音を立てた。ハツカネズミは声の調子を荒げ、ますます耳に響くような声で続けた。

「鋭利な刃物で首を斬られた者、生きながらに腹を開かれた者、得体の知れぬ薬物をうたれた者、そして、たとえそのような責め苦に耐えたとしても、皆狭いガラス瓶の中で窒息死させられたのだ！ 死してもなお獣たちは我らに安息を与えなかった！ ある者は手足を引きちぎられ、またある者は脳味噌をえぐり出された！ 腸を引きずり出された者だっている！ ああ、なんと残忍な、野蛮な獣だ！」

そう言って、ハツカネズミは唸るような咆哮をあげた。柏木は恐怖で後退りした。その様子を見て、ハツカネズミは嘲笑を浮かべた。そして再び声の調子を戻した。

「ところが、そんな我らに慈悲の心を持つ獣がいた。我はその獣に声をかけた。そいつはたいそう驚いていたが、我の話を真剣に聞いていた。そして交渉を持ちかけた。もし我が同胞を解放するのなら、我はそいつの頼みを一つ聞いてやる、とな。そいつはすぐに我らの解放を約束した。そして今日がその約束の日だった。だが――」

ハツカネズミは赤い目をさらに見開いて柏木をにらみつけた。

「そいつは現れず、貴様が現れた。どうなっている。そいつはどこだ？」

柏木は、すぐさま『そいつ』が西野であることを理解した。

「西野は死んだ。自殺したんだ。だからもうここへ来ることはない」

「自殺、だって？」

ハツカネズミはこれまで見たこともないような醜悪な笑みを浮かべた。刹那、その顔を覆う体毛は抜け落ち、肌が露出した。同時に、その白い体毛は黒色へと変わっていった。その顔は苦悶の表情に変わり、太くおぞましい声で怒鳴った。

「この腐りきった外道め！ 貴様が殺したんだ！ 成果も、居場所も、何もかも奪って！ それでも飽きたらず、命まで奪ったんだ！ 自殺に見せかけてな！」

ハツカネズミの顔は西野の顔になっていた。その眼は血走り、怒りと恨みと、殺意に充ち満ちていた。

柏木は短く叫び声をあげ、入り口へと駆けた。扉のノブを回し、開きかけたところで、右足首に激痛が走った。たまらず柏木はしゃがみ込み、足首の方に顔を向けると、西野の顔を持つ黒色のハツカネズミが、その前歯をアキレス腱へと突き立てていた。

黒色の鼠は一度顔をあげると、部屋にいる同胞に向かって大きく叫んだ。

「この獣を食い殺せ！」

その瞬間、あたりの檻という檻の扉が開け放たれた。そして何百という赤い眼が、一斉に柏木に飛びついた。叫び声をあげる間もなく、柏木は全身を食い破られていった。アルビノ特有の真っ白な体毛が返り血で深紅に染まり、熱せられた溶岩のように蠢いていた。そして、柏木の体がすっかり骨と衣服だけになってしまうまで、肉を噛む柔らかい音と血を嚼む音だけが、薄暗い部屋の中でこだましていた。

今や異形の者となった黒色のハツカネズミは、口元を歪めた不気味な笑いを浮かべ、眼前の光景に一瞥をくれた後、開いた扉の隙間から夜の校舎へと消えていった。